

☆ リカード対ケインズ 埋まらない対立

マクロ経済学がわからない。もちろん、自分の頭の悪さもあるのだろうが、信頼できそうな名うての経済学者が正反対の説を主張していて、どちら側を信じたらいいのか、門外漢には決めかねる状況が続いている。

こんな感想を持つのは自分だけかと思っていたところ、専門家でも同様に考えている人がいるようだ。ルーベン大学のポール・デ・グラウウェ教授によれば、マクロ経済学の最高の頭脳たちが「最も基礎的な問題」について真っ向から対立しているのだという¹。

その対立は「リカード主義」対「ケインズ主義」とまとめられている。「リカード主義者」は、「1%の追加支出は GDP の 1% よりもはるかに少ない価値しか生み出さず、税収は増えないがゆえに、予算赤字が増加して維持不可能になる」と主張する。一方で、「ケインズ主義者」は、「1%の追加支出は GDP の 1% よりもはるかに多くの価値を生み出す」と主張する。この大きな違いのせいで、リカード主義を奉じるドイツでは財政出動が慎重になる一方で、ケインズ主義の正当性を信じる米仏では潤沢な財政出動が行われている。

経済学、特にマクロ経済学と金融経済学では、世界的な金融危機を予測できなかったことで大きな危機が訪れている。金融経済学では、「金融資産の価格はすべての手に入る情報を反映している」とする効率市場仮説が、あまりに現実からかけ離れているとして非難的となっている²。加えて、経済学の根本原理と言ってもいい「ホモ・エコノミクス」という「合理的な決定を下す主体」に対する懐疑も広がっている。

思えば、経済学は今までも何度も危機を乗り越えてきた。世界恐慌で古典派経済学に危機が訪れた時にはケインズ経済学が生まれ、ケインズ経済学がスタグフレーションで危機に瀕すると今度は新古典派が生まれてきた。今度の危機も、経済学はおそらく乗り越えて発展していくことだろう。しかし、どちらにしても現在のまま留まるとは考え難い。

☆ モデル化への問い——完璧でなくとも予想せざるを得ないとすれば——

クリス・ディロウ氏は、経済学は予測を行えないことは自明の理であるのだから、今回の世界危機が経済学には根本的な影響を及ぼさないと主張している³。しかし、デ・グラウウェ氏が指摘するように、「突き詰めて言えば、われわれの予測はすべて特定の経済モデルを使って、データを解釈し、将来の進路を予測する」。完全な予測が不可能であることと、予測が行えないことは別であり、不完全であろうと、われわれは将来を予測せざるを得な

¹ “Warning economists are carried along by the crowd” Paul De Grauwe Financial Times 7-22

² “Efficiency and beyond” Economist 2008-7-18

³

http://stumblingandmumbling.typepad.com/stumbling_and_mumbling/2009/07/forecast-vs-mechanisms-in-economics-.html これはブロガーの himaginary 氏経由
(http://d.hatena.ne.jp/himaginary/20090806/forecasts_vs_mechanisms)

[テキストを入力してください]

い。予測するならば、何らかの手立てが必要となる。経済学のモデルが過去に通用するものであれば、仮に経済学者が将来の予測を差し控えたとしても、それを利用して予測を行うエコノミストや投資家が現れるのは致し方ないことだ。

その場合、利用するモデルが極端に違っていると、「市場の参加者が出来事を解釈し、将来を予測する“知的錨”」がなくなり、市場がさらに不安定化してしまう、とデ・グラウウェ氏は主張する。

危機に瀕したマクロ経済学にデ・グラウウェ氏が提示する処方箋は、「根本からの改革」である。デ・グラウウェ氏は「合理的期待」を抱き、同じ「真実」を理解する「経済人」が行動する、というようなモデルには深い問題があるとし、現実の個人は認知的に限界があり、世界の複雑さをあまり理解していないのだから、集団的な熱狂にも捕らわれるのだ、と主張する。現在のマクロ経済学は合理的なエージェントのミクロ的決断を合計すれば経済となるというような根本的な誤りに基づいている。相互行為によってミクロ・レベルでは見えない集団的行動が創出する、というような現象を捉えられないのだ。

デ・グラウウェ氏はこう結論付ける。「アイザック・ニュートンの言葉をもじって言えば、マクロ経済学者は孤独な合理的エージェントの運動を計算できるが、集団の狂気は計算できない。だが、マクロ経済学がもう一度意味ある存在になりたいのであれば、この狂気の計算を始めねばならない。困難だろうが、やらないでいい理由はない」。

☆ ニューロエコノミクスと『自由』の幻想

デ・グラウウェ氏の視点は、その財政出動に対する考え方も含めて、過去 30 年間のマクロ経済学の多くが「鼻屑目に見ても華々しく無価値か、意地悪く見れば全くを以て有害である」と断定したポール・クルーグマン⁴のそれに近いかもしれない。マクロ経済学のミクロ的基礎付けやら RBC やら、ここ最近マクロ経済学はミクロ経済学の成果をもとに数学的に精緻なモデル化を進めてきた。ただ、その土台が現実からかけ離れていたが故、精緻化そのものに大して意味がなかったという立場だ。

こうした見方は、心理学などからの新しいアプローチによっても裏付けられている。カリフォルニア工科大学の下條信輔教授によれば、「効用を実際に計算し、それと正確に相關する脳活動を示す部分を同定した」コリン・キャメラー教授らが始めたニューロエコノミクスが「これからますます広まる」という⁵。

「古典的な経済学は、「理想的な人間像」を前提にしてモデルを組み立てていました。それは、人は自己の利得が最大になるように意思決定をするという意味です。ところが、たとえば「これは 80 円です」という場合、「もともと 100 円ですが 20 円値引きします」というときと「79 円ですけど燃料が高いので 80 円にします」といったときでは、人の振

⁴ “The other-worldly philosophers” The Economist 2009-7-16

⁵ 「サブリミナルに惑わされる脳」Voice 2009 年 6 月号

[テキストを入力してください]

る舞いが全然違う。知覚のイリュージョンにも似た人間の振る舞いは、古典的な経済学では説明できなかった。そこに登場したのが、ニューロエコノミクスだったわけです⁶」

下條信輔氏は、「実際の人間の消費行動は、これまでの経済学が仮定していた人間像とはまったく違う」とし、ニューロエコノミクスの広がりを予想する。その背景には、同氏の潜在意識に関する革新的な研究がある。

下條信輔氏は人間が「潜在認知の塊である脳に薄っぺらに意識が乗っかっただけ⁷の存在であること」を、実験を通じて明らかにした。これは、合理的な人間が意識的な決定を行い、そして行動するという現在社会科学が想定しているパラダイムを突き崩すものだ。下條氏はある対談で、ここまで踏み込んだ発言を行っている。

「敢えて言ってしまうと、自由意志というものは実は存在しなかったということになるかもしれない、ということですね。確かにそれは困る。しかし、その自由というものは近代社会の大前提にある概念ですけど、これまでの人類の歴史の中ではそんなに長いものではない。これは暴論ですが、ひょっとしたら 2045 年くらいには自由という言葉は死語になっているか、若者の間では我々がいま持っているイメージとは相当違ってくる可能性だってあるのではないのでしょうか⁸」

自由意志に関しては、ウィトゲンシュタインが『私が腕を上げる』から『私の腕が上がる』を差し引くと何が残るか？⁹』との問いを発したのをメルクマールとして、様々な主張が展開されてきたが、必ずしも自由意志を正当化できる強力な主張は生まれていない。また、意識に関しても、ジュリアン・ジェインズが 3000 年前まで人間は意識を持たなかったなどと主張していた¹⁰が、それが実験による成果によって見直されつつある。

こうしてみると、実はマクロ経済学の危機とは、社会科学全体の危機、ひいては近代的な社会制度そのものの危機を表象しているだけなのかもしれない。マクロ経済学が危機を乗り越え、妥当性を再獲得しているとき、我々の社会も大きな危機を迎え、それをまさに乗り越えようとしているときかもしれない。

⁶ Ibid

⁷ Ibid

⁸ 「将来は人間の潜在認知さえもコントロール可能になる（第2回）」東浩紀、下條信輔 http://blog.moura.jp/geetstate/2007/08/post_6486.html

⁹ Wittgenstein, L. *Philosophische Untersuchungen*

¹⁰ Janes, J. *The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind*